だにしていなかった筈のものなので、読者としてはなおさら興味が尽きない。当時のこの親友にフロイトは自分の夢についてほとんど腹蔵なく語っていて、思想史的にこの書簡集は、同時進行的に彼が執筆していた主著の一つ

『夢判断』(上・下) フロイト／高橋義孝・菊盛英夫訳 (日本教文社、一九九四)

を読み直すうえで最上の解説になっており、これは信じられないおまけだ。

❸ 『Prismen』東京大学ドイツ語教材(二〇〇二)

この本の編纂にわたし自身も加わっているのでいささか気後れするが、ドイツ語のおもしろさを知るという点で、是非お勧めしたい。薄いドイツ語文法書さえわきにあれば、ひとりでぽちぽちこの書物を開きながら文法を確認することができ、かくて、ありきたりのものではない、新しみをもったドイツのイメージが結ばれてゆくと思う。手前味噌も過ぎたか。

高田康成(大学院総合文化研究科・教養学部教授／英語)

❶ 『ドルジェル伯の舞踏会』レーモン・ラディゲ／堀口大學訳(講談社文芸文庫、一九九六)

『無用者の系譜』唐木順三(筑摩書房、一九九〇)

意中の恋人と同じで、心に秘めたるわが書は他人には言えない。また、加藤周一と中村真一郎はいつもそばにあるため、これも印象に残るとは言いがたい。愛蔵書を眺めて、そうだ、といまさらながら想起したものが上の二冊。ラディゲは、日本では三島由紀夫等に、フランスでは恋愛心理小説の系譜に、それぞれ連なって果てしない。唐木はその他に膨大な全集があって、「最初と最後」を欠いては成り立ち得ないユダヤ・キリスト教文化に対して、わが国の伝統に「途中の発見」があることを説いて面白い。

❷ 『ミメーシス』(上・下) アウエルバッハ／篠田・川村訳 (ちくま学芸文庫、一九九四)

西洋の古典文学が如何に受容されあるいは忘却されていくのか、その様態とメカニズムを明かそうとするのが私の「表象古典文化論」の目論見である。ホメロスからヴァージニア・ウルフまで、「現実描写」といわれるものがどのように行われたかをフィロロギーの手法で鮮やかに論じるアウエルバッハは、この分野における基礎的概論書であり、同時にまたひとつの鑑でもある。

『ルネサンスの教育』エウジェニオ・ガレン／近藤恒一訳 (知泉書館、二〇〇二)

西洋の古典受容史では、当然ながらルネサンスが重要な節目となる。近代における「教養」の形成という意味でも見逃せない。上の書物は、現在この事柄に関して日本語で読みうる最良のものである。最近、改訂新版が出た。

❸ 『政治の成立』木庭　顕 (一九九七)

あたかも一個の芸術作品のごとく、容易に読解を許さないその硬質にして緻密な思考は、たとえ完全に理解し得ないとしても、少なくとも人生に一度おそらく体験するに値する。

月本雅幸(大学院人文社会系研究科・文学部助教授／国語学)

またも「日本語ブーム」だという。様々に日本語の特質が語られ、多くはそれが肯定的に述べられる。だが、それらの書物や発言のうち、過去の日本語の姿を明確に思い描きながら着実に論じたものがどれほどあるかを思うと忽ち不安になる。また、それらの論者は日本語についてこのようなことが分かったと誇りはするが、この点はまだ分からぬということが少ない。何事についてもよく学び、多く考え、そして謙虚でありたい。

❶ 『ヨーロッパ文化と日本文化』ルイス・フロイス／岡田章雄訳注 (岩波文庫、一九九一)

イエズス会の宣教師ルイス・フロイスが天正十三年(一五八五)に著したもの。ヨーロッパの文化・文明と日本のそれとを対比的に短文で描写する。日本文化に対する理解の不足なども当然のことながら感じられるが、例えば「われわれは書物から多くの技術や知識を学ぶ。彼らは全生涯を文字の意味を理解することに費やす」という一節は日本人が漢字とどのように付き合って行くべきか、改めて考えさせる契機ともなる。

❷ 『日本語はなぜ変化するか』小松英雄 (笠間書院、一九九七)

日本語の歴史について述べた書物が、この時代の日本語はこのようなものであったと事実を延々と列挙することが多い中にあって、本書は日本語が時代と共に変化してきた要因を探ろうとするもの。著者は日本語が体系の歪みを整えて言語の運用効率を高める方向に変化したとする。一般社会人や学生を読者に想定しているが、論は斬新で専門家にとっても有益である。

❸ 『日本語を考える』山口明穂 (二〇〇〇)

日本語の発想がどのようなものであるかを論じた書は少なくないが、表面的な現象や日本語表現の一面だけを取り上げたものが多い。本書はそのようなものとは全く異なる。万葉集から横光利一までを取り上げて、文学作品の表現に込められた書き手の意図を明らかにしようとする。種々の可能性を挙げて検討し、これ以外にはありえないという論法で対象に迫っていく。文章は平易であるが、その実内容は相当に高度である。

『平安時代語新論』築島裕 (一九六九)

平安時代の日本語の全体像を記述的に提示した高度な概説書。これを読めば平安時代語が『源氏物語』や『古今和歌集』の言語だけから構成されていたのではないことがすぐに明らかになる。漢文とその訓読によって成立していた広大な世界があったのだということ、そして漢文という外国語が今日の日本における英語のそれに比しても、はるかに重要な位置を占めていたことが容易に想像されるであろう。刊行後三〇年を経て、本書はなお「新論」としての価値を失わない。

中村圭介(東京大学社会科学研究所教授／労働)

❶ 三〇年前のぼくは、生意気でそのくせ怠け者で、当然、劣等生。劣等生にならないための、あるいは劣等生になってしまった時に読む本をすすめていると思って読んで

欲しい。

普段の暮らしで感じることは少ないけれど、いまは、大きな変革の時代らしい。新聞やテレビを見ると、日本の政治や経済がいま新たな姿を模索中であるらしいことに少しは気づく。猪木武徳『自由と秩序――競争社会の二つの顔』(中央公論新社、二〇〇一)は、政治における民主制と経済における市場メカニズムは、それぞれに欠陥をもちながらも、それに優る制度はないという意味で今のところ最善のものであると論じ、それらの欠陥と向き合いながら、二つの制度を維持していくことの必要性を説く。そのためにぼくらに求められるのが、「深読みする能力」＝知性であり、知性を磨くためには古典を読むことが大切なのだというのがこの本の一つのメッセージである。この「学問のすすめ」が三〇年前に出版され、ぼくがそれを謙虚に受けとめていたらと、心から思う。

劣等生であることの自覚はかなりつらい。友だちはみんな立派に見えるし、自分だけが取り残されているように感じる。そんなとき、漫画家であり、冷静な観察眼をもつ軽妙洒脱な文章の書き手でもある東海林さだおの『ショージ君の青春記』(文藝春秋、一九八〇)を読むとホッとする。初恋から早稲田漫研、家出、そして漫画家への経緯を、この時期にありがちな気持ちの移ろいを織り交ぜながら、飾らずに描いたこの本は、誰にも劣等感を与えないという点で貴重である。

❷ 古典を読みながらも一方で、一つの専門分野に興味を抱くというのもよいかもしれない。三〇年前の劣等生は今はなぜか労働問題の研究者になっているが、この分野では、平易な言葉で丁寧に書かれた著作として、玄田有史『仕事のなかの曖昧な不安――揺れる若年の現在』(二〇〇一年、中央公論新社)と小池和男『仕事の経済学』(第二版)(東洋経済新報社、一九九九)をすすめたい。前者は若者をとりあげ、高い失業率、パラサイトシングルなどの現象の背後にあるものを探り、そこからの脱出の一つの路を示し、後者は著者独自の概念である「知的熟練論」を軸として、世にあるさまざまな通説を批判しつつ、日本の労働経済を読み解いている。

平易な言葉の裏にある、緻密な実証と明晰な論理に驚き、さらには若者あるいは日本の労働者に対する暖かな眼差しを感じて欲しい。そして、彼らの説を友だちに自分の言葉で説明できるほどに「わかる」ようになってくれたらなあと思う。

❸ 旺盛な好奇心を持ち続けて欲しい。人身事故で遅れた電車の車掌はなぜ自分のミスでもないのに乗客に謝るのだろうから始まってさまざまなことに疑問をもつおじさんは、なんで小泉首相が自民党の総裁でいられるのだろうとも不思議に思う。樋渡展洋・三浦まり編『流動期の日本政治』(二〇〇二)によると、九〇年代の日本政治では行政府の民主的統制、首相の指導力の強化、構造改革の漸進など新しい政治が登場し、それまでの旧い政治と対抗しつつある。だが経済環境の悪化が新旧対決を曖昧にしている。これに従えば、小泉首相と自民党はこの対決の縮図だということになる。

読みたい本が積まれていくばかりで減らない一つの原因が、三〇年前の怠惰にあるとはわかっていても、本当に、後悔先に立たず、である。

中山洋平

(大学院法学政治学研究科・法学部助教授／比較政治)

近年は大学の外部評価なるものが喧しくなり、東大教師もお役人様のご下問があれば学部の「教育目的」なるものを澱みなく答えられねばならない。わが法学部の場合は、「国家・社会の基本的な諸制度の設計・運用に携わるばかりでなく、それらを根本的観点から検討し、新たな制度・秩序を構想しうる創造的能力を備えた人材を育成して世に送り出すこと」というあたりが正解らしい。いかにもその通り。筆者の担当する比較政治(史)や比較法(制史)などの講義や演習が多数開講されてきたのも、まさしくそのためである。とすると、自由な構想力を忌み嫌う外交や、頑迷固陋な金融行政、何かに取り憑かれたとしか思えない教育政策は、学生時代にこうした貴重な知的訓練の機会を素通りしてしまった卒業生諸氏の所産なのだろうか。とまれ、近い将来、各分野でこの国の基本構造の再構築を担うであろう(逃げ出さないで担って下さいね)皆さんに以下の本をお薦めしたい。

❶『中世的世界の形成』石母田正(岩波文庫、一九九八)

十年近く前、パリにいた頃、友人が日本から携行した蔵書の中に偶然見つけた。伊賀国・黒田庄で悪党など在地勢力が敗北し続けたのは、生産関係などだけではなく、寧ろ東大寺の論理(ドグマ)から脱し得なかった庄民の意識の問題に他ならぬと看破する。一見堅い叙述の中から太平洋戦争下の著者の生々しい主体が立ち現れ、未来を構想するには、まず過去を捉え直し再構成することから始めねばならぬと教えてくれる。

❷ 理念や構想力の実践的な重要性を認識するのに政治史に優る教材はないと信じる。『明治憲法体制の確立』坂野潤治(東京大学出版会、一九七一)『フランス革命の政治文化』L・ハント／松浦義弘訳(平凡社、一九八九)

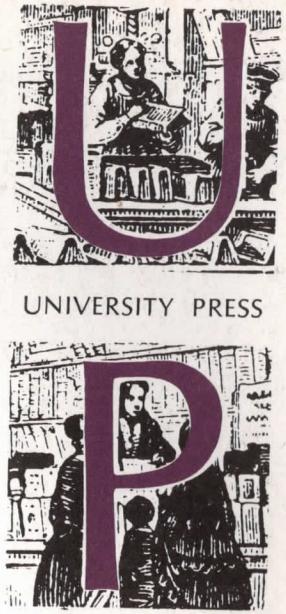
政治史学が成立するには、政治の論理を自由に走らせることのできる知的領域が確保されていなければならない。この二冊の本の執筆当時、それぞれの著者は、伝統的な下部構造決定論や、多分にイデオロギー化した論争から、魅力的な政治事象をすくい出すための営みの最前線に位置していた。その緊張感に支えられた政治の力学の躍動を味わってほしい。

❸ 東京大学出版会は多数の名著・古典を刊行しているが、最近読んだものとして、『貴族の徳、商業の精神』川出良枝(一九九六)を挙げたい。貴族の徳に基づく統治の原理が破綻していく中、勃興する商業の精神と両立させつつ、如何に政治秩序の再編を構想するか。モンテスキューの示した「解」より、彼に先行した三人の論者の方に寧ろ魅力を感じるのは、私自身が様々な選択肢の間で行き悩む過渡期の人間だからだろう。

最後に番外ということでもう一点。『棒がいっぽん』高野文子(マガジンハウス、一九九六)

留学先から二年ぶりに帰国しスーツケースを開いてすぐ、自宅最寄りの本屋で最初に手にとったのがこのマンガ。高度成長期

学問の図像とかたち・28　兆す協同する営み　大場秀章
アンケート　東大教師が新入生にすすめる本 —— 1
スーパーカミオカンデについて思う　加藤幸三郎 —— 28
「ニュートリノ展」と小柴先生　田賀井篤平・橘由里香 —— 29
デジタルアーカイブの現在4　南葵文庫国絵図のデジタルアーカイブ　馬場　章 —— 34
法科大学院と基礎法学　笹倉秀夫 —— 36
可視と不可視のポリティクス　映画『小島の春』と総力戦体制下における〈癩〉の表象　藤井仁子 —— 42
連想・日本美術史16　「伝える」①　無関心な人々　佐藤康宏 —— 47
学術出版 —— 48



4

二〇〇三年　三百六十六号　東京大学出版会

UP　第三二巻第四号（通巻三六六号）二〇〇三年四月五日発行（毎月五日発行）一九七三年三月六日第三種郵便物認可　定価五〇円（本体価格四八円）（一年分五〇〇円送料・税共）

ISSN 0913-3291

「原点」
効く広告づくり

こんなに売れないと言われる時代だからこそ—。
それは広告の原点にもどって、
新商品の開発から、宣伝・広告戦略の
プランニング—実施、そして効果測定
さらにより上位のプランニングへ。
繁栄の循環づくりのお手伝いをいたします。

Advertising Agency
株式会社 とうこう・あい
〒104-0061 東京都中央区銀座8-11-11　TEL.03-3571-6000 FAX.03-3574-1047
http://www.toko-ai.com/

発行者　財団法人東京大学出版会　113-8654　東京都文京区本郷七—三—一　東大構内　振替〇〇一六〇-六-五九九六四　電話〇三-三八一一-八八一四　印刷所　大日本法令印刷株式会社

雑誌コード　08943-4
本誌は再生紙を使用しております